

草田男の真面目な滑稽（二）

飯野幸雄

私の一押しの滑稽俳句は、

ひきがえる
蟾蜍 長子家去る由もなし

草田男の第一句集『長子』の題名になった句である。色々な解釈があるらしいが、句意は「長男である自分が実家を離れて独立する理由はあるはずがない」と理解している。草田男も自句自解で、「…というような事態は、おこり得よう筈がない」と書いている。至極真面目な句であって何が滑稽かと思われても仕方ない。

滑稽だと思うのは取り合わせた「蟾蜍」にある。

蟾蜍は見た目も良くない。草田男の句に「蟾蜍鉄いぼに満ち相交る」があるが、蟾蜍の背中に「鉄の疣」があるのに「好くも相交ることよ」と笑っている。これも滑稽俳句だと思うのだが、蟾蜍の状態を詠んでいるにすぎない。

蟾蜍は関西、西日本での名称は「がまがえる（蝦蟇）」通称「がま」である。比較的大型の蛙で背中に疣状の突起が無数にあって気味が悪い。暖かくなると庭の中に出て落ち着き払った様子でジッとしていた。最近見かけなくなったのは庭付きの家が無くなったからだろうが、私が見たのも四、五十年も前のことだ。大正十四年に草田男の父が建てた杉並区松庵の家の庭にも蟾蜍が居たのではなかろうか。

蟾蜍を模した陶器の大きな置物があり、庭に置かれているのを見たことがある。姿、形を思い返してみると草田男の句が見えて来る。草田男は自分自身のあるべき姿を蟾蜍になぞらえて句中に据えたのだ。

時代劇で武士が上役に対し、両手を突き、平身低頭に近い形で口上を述べる姿が思い浮かぶ。置物の蟾蜍の姿そのものである。草田男は「長子家去る由もなし」と宣言するに際してこの蟾蜍の姿を借りたものと思える。

草田男の「蟻螂は馬車に逃げられし 馭者^{ぎよしや}のさま」

「墮ち蟻螂だまつて抱腹絶倒せり」の句では馬車に逃げられた馭者であったり、抱腹絶倒する人であったりしたように、草田男は虫とか鳥とかの姿、形から発想を飛ばして、人の滑稽な姿に置き換えている。発想法に気づいてみれば、「そんな気がするでしょ」とニヤリとしている草田男が居るような気がする。

「長子」の句は、草田男の第一句集の題名に採用したくらいだから、この「蟻螂」にもそれ相当の思い入れがあっただろう。草田男が「家去る由もなし」と口上を述べなければならぬ事情には背景があった。二十四歳で東大に入学したものの卒業は三十二歳であった。二十五歳の時に父が死に、長子として家を継ぐ立場にあった。三十二歳で成蹊学園に就職しているが、その間家長としては誠に不甲斐ない長子として、腐った奴だとか何だとかやいのやいのと言われたのではなかろうか。

それを草田男は滑稽でもって対処した。真面目くさって口上を述べるのではなく、畏まった蟻螂に述べさせることによって、蛙の面に小便の体を装ったとしたら、中々の剛の者だったと思わざるを得ない。